

〈資料〉

# 「総合的な学習の時間」と特別活動における学生サポーターの役割 －高校生と大学生の調査結果からの考察－

醍醐 身奈

(人間学部児童教育学科)

The Role of Student Supporters in "The Period for Integrated Study" and Special Activities:  
Consideration from Survey Results of High School Students and University Students

Mina DAIGO

(Department of Childhood Education and Welfare, Faculty of Human Sciences)

本研究の目的は、高大連携についての課題を明らかにした上で、大学生が高等学校の「総合的な学習の時間」や特別活動における探究学習に関わる場合、学生サポーターとしてどのような役割が求められているのかについて検討することであった。ここでは、学生サポーターに対して、高校生が活動初期段階でどのような興味や期待をもって参加したのかなどをたずねるアンケート調査を行った。この結果、高校生は「総合的な学習の時間」における探究テーマの選定方法や、特別活動におけるフィールドワークやワークショップのサポート、また、学生生活についての情報共有を大学生に期待していることが分かった。次に、この結果を踏まえた上で、学生サポーターとして自己の役割をどのように捉えているのか、大学生インタビューを行った。その結果、大学生は、ICT 利活用や専門知識をいかした調査方法や体験活動の支援、進路へのアドバイスなど、高校生のニーズに合わせた学習支援と自己の役割を認識し、活動内容の工夫に繋げていたことが明らかになった。

キーワード：総合的な学習の時間、総合的な探究の時間、高大連携、探究学習、特別活動、ICT 利活用

## はじめに

2022年度には、高等学校で新学習指導要領に則ったカリキュラムが新しくスタートすることになっており、特に今回の改訂では「総合的な探究の時間」(文部科学省, 2018a)を中核とした課題解決型学習が注目されている。これは、「探究学習」<sup>1</sup>ともいわれ(文部科学省, 2017)、小・中学校や高等学校の「総合的な学習の時間」(以下、「総合」と記載)で既に行われている学習法の一つである。しかし、探究学習は、非常に複雑な学習プロセスを経ることや(文部科学省, 2018a, p.12)、時間・手間・お金・人など多くのコストを要するため、「総合」だけでは十分な学習成果をあげることが難しい現状にある。

そのため、特別活動<sup>2</sup>における体験活動(フィールドワークや各種調査法など)と組み合わせながら学習を進めていくケースも多くみられるようになった。

こうした中で、近年、急速に広がる高大連携<sup>3</sup>における取組みの一つとして、大学生が探究学習に参加し、学生サポーターとして学習支援を行いながら高校生と関わる機会が増えてきている(根津, 2016)。こうした活動は、高校側からみると大学側からの専門知識の提供やICTを利活用した学習サポートなどを受けることができる好機になっており、また、大学側では高等教育の専門性をいかし、高校生に大学への興味をもってもらうための好機にもなっている(川合, 2018)。

しかし、先行研究では高大連携の探究学習における課題発見や、構想部分のファシリテーションが難しいことも指摘されている。藤野・石川(2018)によれば、これらの問題を解決するには、十分な事前準備や中・長期的な活動が必要となるが、高大連携では、そうした時間を確保するのが困難であるとの指摘がなされている。

本研究では、先行研究で指摘されている課題の解決策の一つとして、高校生の探究学習に関わって、「総合」の理論的学習における支援と、特別活動における体験活動の支援の二つの側面に細分化し、学生サポーターの役割を具体的に検討する必要があると捉えた。また、学生サポーターは、高校生が自分たちと活動することにどのような期待をもっているのかを、活動初期段階で認識することで、最初の関係性を構築しやすくなるのではないかと予想した。

## 1. 本研究の目的

本研究の目的は、高大連携についての課題を明らかにした上で、第一に、大学生が高校の「総合」や特別活動における探究学習に学生サポーターとして関わった場合、どのような役割が求められているのかについて、高校生へのアンケートを基に検討することである。第二に、これらの調査結果を学生サポーターに活動初期段階で伝えた場合、大学生はどのように自己の役割を認識し、探究学習の活動内容を工夫するのかについて明らかにすることである。

## 2. 研究の方法

### (1) 調査対象者

本研究では、高校の「総合」や特別活動における探究学習に学生サポーターが関わる上で、相互の関係性が十分に築かれていない、活動の初期段階における高校生と大学生を調査対象者として選定することにした。

ここでは、A大学の大学生と、2020年夏からA大学に学習支援サポートを業務委託したB市の高校生を調査対象とすることにした(表1を参照)。なお、高校生は1～2年生の24名、大学生(C研究室のゼミ生が中心)は、学部1～4年生の13名であった。

学生サポーターの関わり方には、①各高校の「総

合」(主に理論的学習)と、特別活動(主に体験活動)における探究学習の全体支援と、②主に探究科に在籍し、本研究の調査に協力することを同意した生徒への個別支援の二つがあった。本研究の高校生へのアンケート調査対象者は、大学生が個別支援を行っている高校生に限定して行った<sup>4</sup>。

表1 調査対象者の概要

	1年生	2年生	3年生	4年生
A大・大学生	6(5)	1(0)	4(2)	2(1)
B市・高校生	16(10)	8(8)		

※数字は人数、( )内は女子。

本研究における対象者として、A大学の大学生及びB市の高校生を選定した理由は、主にA大学とB市で高大連携の仕方に特徴がみられたことにある。B市では、公立高校における「高校の魅力化プロジェクト」を数年前から立ち上げており、A大学に業務委託をすることによって、このプロジェクトのさらなる拡充を求め、市の予算を確保・投入した経緯があった。また、市の公認プロジェクトであるため、市内の2つの公立高校の生徒と教職員が関わる事ができた。さらに、「総合」や特別活動にも、公的に学生サポーターが関わっていける点なども、他地域ではあまりみられない教育実践である。こうした点を踏まえた上で、調査地域や対象者の選定を行った。

### (2) 調査時期

高校生へのアンケート調査：2020年8月

大学生へのインタビュー調査：2020年9月～10月

### (3) 調査の手続き

#### (i) 高校生アンケート調査の手続き

高校生に対するアンケート調査の手続きに関しては、以下の通りである。A大学及びB市における連携協定に基づき、法人で定める個人情報保護の規則に則り、倫理的配慮に十分留意した上で行った。具体的には、研究の目的、方法、データの取り扱い、個人情報の保護、倫理的配慮などについて、B市のプロジェクト担当責任者、各高校の校長・教頭に対して文書にて説明を行い、了承を得た。さらに、調査対象者である高校生本人とその保護者に対しては、B市に説明したものと同内容のもの(研究の目的など)について、口頭及び文書で説明を行った。本調査への協力は任意であり、また、それによって個人が特定されるものではないことを調査実施者

から説明し、その後同意者のみに Web 調査を介して回答を求めた（Web 回答用の URL は依頼書に掲載）。本調査の回答は無記名であり、調査目的に合意を得た場合にのみ回答する形式で行われた。実施時間は約 10 分ほどであり、アンケート調査に対して謝礼の提示は行っていない。

(ii) 大学生インタビュー調査の手続き

学生サポーターに対するインタビュー調査に関しては、先述した高校生インタビュー調査における調査対象者を A 大学の大学生に変更し、同様の手続きを経た上で実施した（ただし、調査への参加については、本人の承諾のみで可能とした）。実施時間は約 15～20 分であり、インタビューに対する謝礼の提示は行っていない。

(4) 調査内容

(i) 学生サポーターによる高校生との関わり①

B 市による A 大学への業務委託が締結される約半年前の 2020 年 2 月に、学生サポーター 10 名が B 市の一つの高校の「総合」と特別活動の学習成果発表会に参加した。ここでの学生サポーターの役割は、高校生の探究学習グループ毎の研究発表を見た後で、各グループにそれぞれファシリテーターとして一人ずつ入り、研究成果に対する理論的アドバイスを行った。高校生も大学生も、この時点では、相互の所属以外の情報（名前なども含む）は知らずに、研究交流を行ったため、この時点での関係性はほとんどできていなかった。

(ii) 学生サポーターによる高校生との関わり②

B 市による A 大学への業務委託が締結された後、2020 年 8 月、当初予定していた高校生と大学生のプレ探究学習がコロナ禍による影響で、中止となってしまった。そこで、ICT を利活用しオンライン（ZOOM を使用）で参加可能な高校生を高校教員の協力を得て集め、夏休み期間を利用して探究サポート説明会を 5 回（同内容）に分散して行った<sup>5</sup>。

(iii) 高校生に対するアンケート調査の内容

表 2 は、2020 年 8 月の探究サポート説明会の開催直後に、Web アンケートを用いてたずねた内容である。ここでは、「総合」と特別活動における探究学習について明確な区別をせずに、高校生に対してたずねた内容である。

表 2 高校生アンケート調査の内容

◇探究サポート説明会&探究学習ワークショップに参加して	
①	何が印象に残ったか、特に関心を持ったことは何だったか。
②	説明を受けてよく分からなかった点、探究学習を行う上で不安な点は何か。
③	探究学習を通じて、大学生とどのようなことを話してみたいと思ったか。または、どのようなことを一緒にやってみたいと思ったか。

(iv) 大学生に対するインタビュー調査の内容

高校生アンケート調査が終了し、約 1 か月後に調査実施者が学生サポーターにアンケートの結果について資料を使って口頭で一斉に説明した。その後、約 1 か月間をかけて半構造化インタビュー法を用いてたずねた内容が表 3 である。

表 3 大学生インタビュー調査の内容

◇探究サポート説明会&探究学習ワークショップに参加した高校生の感想を踏まえて	
①	高校生がどのような期待を自分たちに行っていると思ったか
②	高校生が探究学習や大学生と一緒に学ぶことについてどのような不安を持っていると思ったか
③	探究学習を通じて、高校生とどのようなことを話してみたいと思ったか。または、どのようなことを一緒にやってみたいと思ったか。
④	学生サポーターとしての役割には、どのようなことがあると思ったか。あるいは、どのようなことを実際に行ったか。
⑤	どのような学習ツールが必要だと思ったか。

3. 調査結果

(1) 高校生アンケート調査の結果

本研究では、高校生アンケート調査から得られた回答を、調査実施者がその内容やキーワードから分類した上で、項目ごとにまとめた（①の質問では 5 項目、②は 1 項目、③は、2 項目）。その結果を示したものが、表 4 である。

表 4 高校生アンケート調査から得られた内容

①	何が印象に残ったか、特に関心を持ったことは何だったか。
<p>&lt; A &gt; 大学生との交流への興味・関心</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインで大学生と話せたことです。</li> <li>・大学生との話し合いがとても楽しく、他の人のことについても触れることが出来て良かった。大学生が自分の考えをどんどん引き出してくれたこと。</li> <li>・進んが、画面上でもスマートだった。</li> </ul>	

<p>&lt; B &gt; 自己の探究への興味や関心</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が好きなこと、興味があることについていろいろ考えられたこと。皆さんと実際にお話しできたこと。</li> <li>・自分のしたい研究について深く考えられた事。</li> <li>・自分のしたいことについて、どうやったら実現できるのか考えたこと。</li> <li>・自分の興味のあることで探究活動について考えるのがすごく楽しかった。</li> </ul>	
<p>&lt; C &gt; 自己の将来についての興味や関心</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の好きなことについて、10年後どうなっていたいかを考えたこと。</li> <li>・「こうしたらいいな」から、10年後を考えることで“種”みたいなのが出た。</li> </ul>	
<p>&lt; D &gt; 他的高校生との交流についての興味や関心</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・付箋*を使ってどんどん話を進めて、みんなと話したこと。 *付箋ツール「Miro」を使用。</li> <li>・初対面の方たちと探究について、濃い話し合いが出来たこと。</li> </ul>	
②	<p>説明を受けてよく分からなかった点、探究学習を行う上で不安な点は何か。</p> <p>(探究を進める上での) 自分自身への気づき</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の趣味やしたいことが、まだ自分でもよく分からない。</li> <li>・好きなことをどのように広げていきたいかが、分かっていない。</li> <li>・自分が何を探究したいのかが分からない。</li> <li>・自分の探究活動方法について。</li> <li>・どんな人に話を聞けば良いか、ということ。</li> </ul>
③	<p>探究学習を通じて、大学生とどんなことを話してみたいと思ったか。または、どんなことを一緒にやってみたいと思ったか。</p>
<p>&lt; A &gt; 大学生生活に対する情報や経験の共有</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・将来の夢について話してみたい。</li> <li>・どんな事を研究していて、現状はどうなっているのか、これからどうしていきたいか。</li> <li>・私と同じ年の時に何を考えていたのか。</li> <li>・今までに、これをして人生が少し変わった気がすると思ったことを教えて欲しい。</li> <li>・趣味はどのように見つけたのか。</li> </ul>	
<p>&lt; B &gt; 専門分野の知識・スキルをいかしたサポート</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のテーマについていろいろな視点から質問して欲しい。</li> <li>・テーマの見つけ方の話をしたい。</li> <li>・色々な探究や研究の話を聞いてみたい。</li> <li>・今後の探究活動について、相談したい。</li> <li>・フィールドワークをやってみたい。</li> <li>・一緒にどこかに見学に行ったり、協力して何かを作りたい。</li> </ul>	

(2) 大学生インタビュー調査の結果

学生サポーター13名のうち、インタビューに回答したのは8名であった。そのインタビュー調査の内容の一部を示したものが表5である。

表5 大学生インタビュー調査の内容

①	<p>高校生がどのような期待を自分たちにはしていると思ったか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生は、自分自身の興味を持っているテーマを具体的にを見つけることができ、今後の探究意欲を見せてくれたので、そうした関心を引き出してあげることだと思う。</li> <li>・高校生たちから、「思っていたよりもフラットで楽しかった」や、「探究テーマを深めるために頑張りたい」といった感想をもらったので、なるべく高校生と近い目線で探究を掘り下げることが求められているのではないかと思った。</li> </ul>
②	<p>高校生が探究学習や大学生と一緒に学ぶことについてどのような不安を持っていると思ったか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・説明会で、何を探究するか考えてみようと呼びかけた時に、急に考え込んでしまう人がいた。自分を知ることにに対する不安を持っている。</li> </ul>
③	<p>探究学習を通じて、高校生とどんなことを話してみたいと思ったか。または、どんなことを一緒にやってみたいと思ったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・専門分野をいかした説明をすることにより、今後の探究活動を行っていく基盤を一緒に築きたい。</li> <li>・高校生一人一人がもっと具体的な探究テーマに出会えるよう促すために、どんどん自分の興味のあるワードを引き書き出させたい。</li> </ul>
④	<p>学生サポーターとしての役割には、どのようなことがあると思ったか。あるいは、どのようなことを実際に行ったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に行行政や学校との連携も含め協議をして、<u>フィールドワーク</u>を行うこと。授業当日は<u>ファシリテーター</u>として<u>ワークショップ</u>のリードを行うこと。</li> <li>・高校生が興味を持った分野に対して、質問をすることで深堀をし、一人ひとりがより具体的な探究テーマを定めることができるように<u>オンライン</u>、<u>対面の両方</u>で尽力する。</li> <li>・まず、本プロジェクトのコンセプトを知ってもらうことを目的に<u>コラージュ</u>を行い(自分の好きを見つけてもらうために雑誌を切り取り、コラージュをしてもらうもの)、<u>ワークショップ</u>で使うプリントを挟むためのオリジナルファイルを作成した。生徒一人ひとりが自分のテーマを決定し、互いに<u>フィードバック</u>し合ってテーマに磨きをかけた。</li> </ul>
⑤	<p>どのような学習ツールが必要だと思ったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ツールではないが、探究する上での宿題も細かく指示を行った結果、高校生たちは次の授業に何をどうすればいいのかが具体的に把握し、一人で調べ物ができる状態になった。<u>具体的な方法</u>をさらに提案していきたい。</li> <li>・自分の学習を振り返るための<u>探究ノート</u>や、調べた内容が書かれている<u>プリントをファイル</u>しておくこと。</li> </ul>

\*なお、下線部は調査実施者が引いたものである。

## 4. 考察

### (1) 学生サポーターに対する高校生の期待

表4-①から、高校生が学生サポーターと共に探究学習を行っていく際に、特に関心をもったことは、主に「(1) 大学生との交流、(2) 自己の探究、(3) 自己の将来、(4) 他の高校生との交流」の四つであった。ここでは、「大学生が自分の考えをどんどん引き出してくれたこと」(表4-①A)と高校生が記載していたように、学生サポーターの「Miro」などを活用したコミュニケーションの取り方を学び、ICTツールの使い方などにも興味を示していた。また、表4-①Cからは、高校生が探究テーマを考える上で、「10年後の自分」について、学生サポーターから考えるように促されたことにより、自分自身の在り方生き方についての関心を強めたことも見受けられた。その一方で、表4-②から「自分が何を探究したいのかが分からない」など、探究学習におけるテーマ設定への揺らぎに繋がり、捉えようのない不安や悩みを自覚している様子もみられた。

さらに、表4-③から、高校生が学生サポーターに対して、「大学生活に対する情報や経験の共有」や「専門分野の知識・スキルをいかしたサポート」などを期待していることが明らかになった。藤野・石川(2018)によれば、高大連携における大学生ファシリテーターの役割が難しく、関係性構築に時間がかかることが指摘されている。しかし、本研究で示されたように、学生サポーターが、大学で学ぶ専門分野のことや、大学生活など、高校生が興味や関心をもっていることから話を始めることによって、活動初期段階であっても、相互の心理的距離が狭まる可能性はおおいにあると推察できる。

### (2) 学生サポーターにおける自己の役割認識

表5-①から、「なるべく高校生と近い目線で探究を掘り下げることが求められているのではないかと述べていたように、大学生は学生サポーターとして、高校生に寄り添い、共に学ぶ姿勢が求められていることを認識している発言がみられた。表5-②からは、活動初期段階において高校生と探究テーマを設定しようとした際、考え込んでしまう高校生が複数人いたことや、高校生の中に探究テーマ選択に不安をもっている人が、アンケート調査から

も一定数存在することが明らかになった。そこで、学生サポーターは「総合」の学習計画の一部を変更し、高校生が何に興味をもっているのか、日常生活の何が課題だと思っているのかなど、より身近で、具体的な質問を掘り下げる時間を増やすなどの工夫を行っていた。

また、表5-③の「専門分野をいかした説明」や表5-⑤の「(調べ学習の)具体的な方法」にみられるように、学生サポーターは、自分が学んでいるICTや専門分野の知識・スキルを、高校生向けにアレンジして説明することが必要だと感じているようであった。学校の「総合」における全体支援では文献や資料の探し方について説明し、さらに個別支援では一人一人の探究テーマに応じた関連文献を紹介するなど、学生サポーター自身も高校生のテーマにあわせて文献検索を行っていたことも明らかになった。

特別活動では、表5-④にみられるように、「フィールドワーク」や「ワークショップ」、「オンライン、対面の両方で尽力」、「コラージュ」などの実施方法、さらにファシリテーターとしてどのように議論を進めていくのかなど、実践的な体験活動を通じて、何がポイントになるのかを説明していた。また、自作の探究ノートやファイルを見せながら説明したり、オンラインと対面学習を組み合わせたハイブリッド型の学習内容を工夫したりしながら進める様子もうかがえた。

## おわりに

本研究では、探究学習を進めるにあたって、高校生が学生サポーターに対して、「大学生活に対する情報や経験の共有」や「専門分野の知識・スキルをいかしたサポート」などの役割を期待していることが明らかになった。一方、学生サポーターは、高校生アンケートの結果を活動初期段階に確認したことで、「総合」や特別活動において、ICTの利活用や専門知識をいかした研究方法、フィールドワークやワークショップなどの体験活動におけるサポートの役割の必要性を認識し、学習内容を工夫していた。このことから、限られた時間の中で高大連携の一環として研究交流を図っていくためには、学生サポーターに対する高校生の期待や要望をできるだけ早い

段階で調査し、大学生に共有することが、学習支援への創意工夫に繋がっていくと予想される。

今回の調査では高校の「総合」や特別活動に、多く大学生が参加し、研究交流を行うことが予定されていたが、コロナ禍による影響でそれが実現せず調査対象者が限定されてしまった。さらに、高校におけるICT機器の普及が遅れているため、高校と大学をオンラインなどで結びつけることができず、本プロジェクトに参加できる高校生は、オンライン環境が自宅に整っている生徒に限定されてしまった。ICTを利活用しながら、どのような状況下でも高校生の学びを止めない高大連携システムの構築を行っていくことが今後の課題として残されている。

### 《謝 辞》

本研究の一部は、第15回公益財団法人博報堂教育財団の研究助成を受けて行われた。

### 《註》

- 1 ここていう「探究学習」(探究的な学習)とは、「問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく」ことである。具体的には「探究的な学習における生徒の学習の姿」に示されているような学習プロセスを経て、物事の本質を探って見極めようとする一連の知的営みのことである(文部科学省, 2017)。本研究においては、「探究学習」及び「課題解決型学習」についての定義を、これと同様のものとして取り扱うこととする。
- 2 各教科のほかに、学校がその教育的意義を認めて、集団活動を通して、個性の伸長、自主的・実践的態度を育てることを目的として、教育課程上に位置づけられている領域である。高等学校の特別活動は、ホームルーム、生徒会活動、学校行事の三つを、その内容とするものである(文部科学省, 2018b)。
- 3 高校と大学が連携して行う教育活動であり、大学生などが高校に出向いて行う出前授業、高校生の大学での公開授業参加、広義には入学者選抜や大学の初年次教育なども含める。
- 4 この調査対象者である高校生は、主にB市に

ある一つの高校の探究科に所属していた。そのため、学校の「総合」と特別活動において大学生による全体支援を受け、かつ放課後などを活用して個別支援も受けながら探究学習を進めていく必要があり、大学生と関係性を早く構築する必要があった。

- 5 説明会で提示した主な内容は、「探究とはどういうものなのか」、「どうやってテーマを設定するか」、「フィールドワークをどのようにするのか」などであり、「総合」や特別活動の時間を活用して、どのような探究学習ができるのかを具体的に提案した。

### 《参考文献》

- 藤野博行・石川勝彦 (2018) 「高大接続の実現に向けた授業プログラムの試みと評価」, 『社会文化研究所紀要』, Vol. 79, pp.53-66.
- 川合宏之 (2018) 「我が国における高大連携の変遷と今後の展望」, 経済教育学会 『経済教育』, Vol. 37, pp.20-26.
- 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』, 東山書房.
- 文部科学省 (2018a) 『高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編』, 学校図書.
- 文部科学省 (2018b) 『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』, 東京書籍.
- 根津朋実 (2016) 「カリキュラム研究からみた『高大接続・連携』の諸課題」, 『教育学研究』, Vol. 83 (4), pp.16-28.
- (受付日: 2020年11月1日、受理日2021年2月5日)